

天敵さんはラッコを離さない

もふもふ獣人カントボーイBL 全10話

体験版

1

第1話

天敵、来店

「アジ定食おまち！ 貝汁は熱いから気をつけてね♡」

「リロくーん、こっちお酒追加ね」

「あいよ～。あ、しっぽ踏まないでよね、その兄さん」

港町の食堂かいがら亭。ふわふわのしっぽが座敷の間を泳ぐようにすり抜けていく。

「今日も毛づやがいいねえ、看板ラッコは」

「へへ、朝いちで毛づくろいしたからね♡
触るなら一撫で百円だよ」

「商売上手なこと」

「ばあちゃんは常連だから、まけて五十円♡」

「ふふ、リロちゃんに撫でさせてもらえるなら安いもんさ」

「まいどあり～。……あれ、みんな、急に黙っちゃって、どうしたの」

アザラシのばあちゃんの笑い声が、途中で止まった。

からん、と戸が鳴って、潮の匂いが変わった。

「……飯、食えるか」

戸口をふさぐ大きな影。黒い作業着に白い喉元。逆立った背びれみたいな黒髪。

盆を持ったままり口の尻尾の毛がぶわりとふくらんだ。

(シャチだ)

海で暮らすラッコにとって、シャチは天敵。

会ったことがなくても体の芯が覚えている。

「お、おひとりさま……こちらへ、どうぞお……」

「震えてんな」

「ふ、震えてませんー。ラッコはみんなこういう毛並みのなの一」

「そうか。おすすめは」

「え、えっと……今日は貝がいいよ。網揚げの帰りでしょ、あったかいの食べな。ウニもあるけど、ウニはだめ」

「なんでだ」

「いちばん大きいのは、俺のまかないだから」

「ガキか、お前は」

「ラッコにウニを譲る店員がいたら連れてきてよ。……あの。ほんとに、とって食わない？」

「今日はな」

「今日は、って……その言い方、こわいよお」

「玄海だ。今度からこの港の漁を仕切ることになった。しばらく世話になる」

「うわ……漁師団の新しい頭。よりによって、いちばん強いやつが来ちゃった」

冗談か本気か読めない目だった。

「リロちゃん、あたし先に上がるからね。戸

締まりよろしく」

「はい、おかみさん、おやすみ～」

人間のおかみさんが母屋に引っ込んだ深夜。

誰もいない座敷でリ口は自分のしっぽを抱いて丸くなっていた。

「なんだ。まだ起きてたのか」

「うわっ!? げ、玄海さん!? 帰ったんじゃ……」

「網を忘れた。……お前、そんなところで寝るのか」

「寝れないだけ。……ラッコってさ、海で寝るとき、流されないように誰かと手えつなぐんだよ。じいちゃんの代からの癖。一人だと体が

ずーっと『起きてろ』って言うの」

「女将は」

「おかみさんは人間だもん、毛もないのに悪いじゃん。いいんだよ、慣れてるし」

「慣れてるやつはしっぽ抱いて震えたりしねえよ」

「……っ、震えてないってば」

「強がるな。目、とろとろじゃねえか」

大きな手が目の前に差し出された。

「貸してやる」

「……え？」

「手だ。つないでりゃ流されないんだろ」

「て、天敵と手えつなぐラッコが、どこにいるのさ……」

「ここにいる。ほら、早くしろ」

「う……じゃ、じゃあ、ちょっとだけ。ちょっとだけだからね。あと寝顔は見ないでよね」

「見ねえよ。寝ろ」

節くれだった指に恐る恐る指をからめる。飲みこまれそうなくらい大きい。なのに、逆立っていたしっぽの毛がゆっくり寝ていく。

「……あったかい……くない？ シャチのくせに……」

「シャチは体温が高いんだよ」

「へえ……知らなかった……。ん……おやすみ、てんてきさん……♡」

あっという間に寝息が聞こえはじめた。玄海は空いた手で口元を覆う。つないだ手にそっと鼻先を寄せた。

「……おい。なんだ、この甘い匂いは」

「ん……なぁに……てんてきさん……♡」

「なんでもねえ。寝てろ」

返事の代わりに小さな手がきゅうっと握り返してきた。玄海はもう動けなかった。

2

第2話

発情、はじめて

「リロちゃん、顔まっ赤よ。熱でもあるんじゃないの」

「だいじょぶ……ちょっと、エネルギー切れなだけ……はは」

「無理しないの。今日はもう閉めるから、奥で休んでな」

「うん……ごめんね、おかみさん……」

体の芯が朝からずっと熱い。ラッコにも季節にいちど発情期が来る。じいちゃん「番のいる子だけの話」と言っていたのに、一人の自分にどうして。

誰もいない座敷。畳に丸くなっていると、か

らんと戸が鳴った。

「……鍵、開いてたぞ」

「っ、げ、玄海さん!? きょ、今日はもう閉
店……っ」

「わかってる。表まで、匂いが漏れてた」

「にお……っ、や、やだ、来ないでよお……っ」

「シャチはな、声を飛ばすだけで、どこに何
がいるかわかる。……お前がどこで隠れても、
無駄だ」

畳を這って逃げる。けれど大きな手に足首を
つかまれ、あっけなく引き戻された。

「発情、はじめてか」

「し、知らな……っあ♡」

「濡れてんな。まだ触ってもねえのに」

「ちがっ、これは、発情期の、せいで……っ」

「へえ。じゃあ、誰のせいで濡れたか、言ってみ♡」

「い、言うわけ、な……っあゝ♡」

太ももの間を節くれた指がなぞる。下着をずらすと、まん汁がとろりと糸を引いた。

「すごいな。お豆、こんなにぷっくり勃たせて」

「みな……っ、見ないでってばあ……っ♡」

「ここ、こねてほしいんだろ♡」

「ちが……っ、あ、あっ♡やだ、そこ、っ♡」

「んっ♡や、やだ、声、でちゃ……っ♡」

「我慢すんな。もっと鳴け、リ口♡」

くりくりくり♡くにくにくに♡指の腹でクリトリスを転がされて、腰が跳ねる。

（なにこれ……っ♡自分ですのど、ぜんぜん、ちがう……っ♡）

「て、てんてきの、くせに……っ、あゝ♡」

「強がるな、リ口♡自分から腰、押しつけてきてるぞ」

「おし……っ、してな、っ♡あ、や、こねちゃ、らめ♡」

「こねられんの好きか。ちゃんと言え、リロ

♡」

「す……っ、すきい……っ♡もっと、こねてえ……っ

♡」

「素直だな、リロ♡発情期のカラダは、正直

でいい♡」

「や……っ、勝手に、腰が……っ、とまんな……っ

♡」

ぬちゅぬちゅぬちゅ♡くちゅくちゅくちゅ♡濡

れた音が大きくなる。玄海が身を伏せ、お豆を

れろっと舐め上げた。

「ひぁっ♡な、舐め……っ、それだめ、だめえ……っ

♡」

「先っぽ、こんなに小さいのに、ちゃんと勃
つんだな♡」

「い、言わな……っ、あ♡あ♡吸っちゃ、やあ……っ

♡」

「ここ、ぴくぴくしてんぞ♡もっと吸ってほ
しいって、震えてる」

「ちが……っ、ふあ♡あ♡らめ、そんな、ちゅ
うちゅうしたらあ……っ♡」

「ちゃんとねだれよ、リ口♡言えたら、うん
と気持ちよくしてやる♡」

「んう……っ♡て、てんてきさんの、舌あ……っ、

もっと、ちゅうちゅうしてえ……っ♡」

ぴちゃぴちゃぴちゃ♡

ちゅぱちゅぱちゅぱ♡揺れる腰を大きな手で
押さえこまれ、逃げ場がない。

「あ♡あ♡らめ、らめっ、なんか、くる♡くるっ
♡」

「もうイっちゃうのか、早いなあ♡いいぞ、
てんてきの舌で、イけ、リ口♡」

「い、いくっ、いくう……っ♡♡ん° ☒☒☒☒
♡♡」

びくびくびく♡がくがくっ♡と腰が跳ねて、リ
口は初めて、他人の口でのぼりつめた。

ぐったりした太ももに硬くて熱いものが当たる。その大きさに涙目を見開いた。

「な……なにそれ、おっき……」

「今日は、指と舌だけにしといてやる」

「……え？　なんで、とちゅ……っ」

「はじめてが発情でぐずぐずのまんまじゃ、
かわいそうだろ」

「っ……ばか、いじわる……」

「次までに、覚悟しとけよ」

戸が閉まっても、奥に残された疼きだけが引
かなかった。

体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。
選択も、関係も、そして――結果も。

知らないままで終わるか、
それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。

天敵さんはラッコを離さない